シェイクスピア劇とローマ史の人物像
——プルタルコスを中心に——

(I)
『ジュリアス・シーザー』論　その一

木　村　輝　平

(序)

シェイクスピアの作品はその素材を抜きにして語ることができないのは言うまでもない。素材の部分的，断片的利用はもちろんのこと，シェイクスピアはそのほとんどの劇において劇構成の枠組として，歴史書，物語，あるいは既成の演劇などを利用している。したがってシェイクスピア劇の素材の探索，そしてその素材とシェイクスピア劇との比較研究ということがシェイクスピア学の重要な一部門を成すのは当然であるし，他のシェイクスピア学の多くの分野もこの素材研究の示すところを無視しては成立し得ない。また，たんにシェイクスピア劇の鑑賞・評価という場合においてでさえ，まったく素材の知識を欠いているならば見当違いの判断を下すことにもなりかねない。

しかしまた一方で，この考証を深めようとするあまりに，シェイクスピアの作品と係りを持たない範囲にまでこれを進めてみてもシェイクスピア学という見地からも，また劇の批評，鑑賞という見地からも行過ぎで無意味な営為ということになってしまう。しかし，いったんシェイクスピア学という枠を離れてみるならば，シェイクスピアの使用した素材の中にはそれ自体が内容豊富で面

白く，十分考察の対象たり得るものが少くないことがわかる。このことは，英国史劇であれ，いわゆるローマ史劇であれ，それらの歴史劇の背景となった史書，ひいては史実そのものについてあてはまるが，特にローマ史劇の場合においてあてはまると思われる。

古代ローマでは勃興期から没落期に至るまで，その長い歴史の中できわめて多彩で，波乱に富む政治のドラマが展開されたことはよく知られている。そしてシェイクスピアが扱い得たのもこの豊かな歴史のごく一部分にすぎない。現実の歴史と演劇を同列に論じられないことはもちろんであるが，その面白さ，魅力という点からすると，古代ローマ史の世界はシェイクスピア劇に劣るものではない。したがって，シェイクスピア劇の素材としてこれに取組み始めた人が，その動機を離れて，史実自体に興味を抱くようになったとしても不思議はないであろう。

筆者もシェイクスピアのローマ史劇に惹かれると同時にローマ史自体の面白さに，あるいはより正確には，そこに登場する人物たちの個性とその人間関係の面白さに魅せられた一人である。これから展開される拙論はいわばこのような二兎を追い求める欲張った楽しみの所産であって，一度シェイクスピアを忘れて古代ローマの人物たちに接した後で，改めてシェイクスピア劇を見直したものである。

したがって，拙論においては背景的史実が劇そのものと対等な資格で扱われることになり，先に述べたように，厳密な意味でのシェイクスピア学，あるいは批評からは逸脱せざるを得ない。またある意味ではシェイクスピア劇を貶める危険もなしとしない。しかしながら，このような難点を承知した上であえてそれを試みようというのは，シェイクスピア劇には色々な接し方があってよいからであり，そしてそれ以上に，拙論のようないわば趣味的な視点がかえって作品理解に奥行きを与え，その鑑賞に資する可能性もあり得ると思われるからである。

シェイクスピアのローマ史劇とは『ジュリアス・シーザー』,『アントニーとクレオパトラ』, それに『コリオレイナス』であるが, これらの劇で扱われている人物や事件を知るための資料としてまず第一に挙げられるものはプルタルコス (*Πλουταρχος*) の『対比列伝』(*Βιοι Παραλληλοι*)[1] であろう。『対比列伝』は歴史上著名なギリシャ人とローマ人の伝記ひとつづつをその類似性によって並置し, 原則としてその後に簡単な『比較論』を付すという体裁になっている。[2] この対は全部で二十二組で, その内一組は二人づつの比較となっているので合計四十六人, これらの他に対をなしていない伝記が四人分ある。よく知られているようにシェイクスピアのローマ史劇の源泉はこの『対比列伝』であって, シェイクスピアは素材としてばかりでなくその表現においても, ノース (Thomas North) の英訳版[3]にかなり忠実に依拠している。具体的には『コリオレイナス』は『コリオラヌス伝』に,『ジュリアス・シーザー』は『カエサル伝』,『ブルートゥス伝』, および『アントニウス伝』に,『アントニーとクレオパトラ』は『アントニウス伝』にそれぞれ直接的な典拠を置いている。しかしこれらの他にも,『ジュリアス・シーザー』や『アントニーとクレオパトラ』中の主人公たちとほぼ同時代の人物の伝記として『列伝』中に収められているのは,『ポンペイウス伝』,『キケロ伝』,『小カトー伝』,『クラッスス伝』および『ルークルルス伝』などがある。(なお, ローマ史劇という範疇には属さないが,『アセンズのタイモン』はある程度その筋を『アントニウス伝』の一部に拠っている。)

資料としてはプルタルコスの他にも, 彼とほぼ同時代のローマ人, スエトニウス (Gaius Suetonius Tranquillus) の『十二皇帝伝』(*Vitae Duodecim Caesarum*)[4] や, ややおくれてアピアノス (*Αππιανος*)[5] やカシウス・ディオ (Cassius Dio)[6] のローマ史の著作などが比較的重要なものであろう。また歴史上の人物自身の手になる著作や書簡などはより直接的資料となることは言うまでもない。しかし, シェイクスピアが取上げた人物たちの性格, 人物描写という観点からすれば, その記述の豊富さと抱括性から, やはりプルタルコスがこれらの内でもっとも

有力な資料であることは確かである。

ただプルタルコスの記述が完全なものでも，必ずしも正確なものでもないことは言うまでもない。『列伝』は歴史を個性や人格という面から描いており，そこにプルタルコスのねらう面白みがあるわけだが⑦，それだけにその信頼性は読者にはある程度疑問として残らざるを得ない。彼は伝記を書く上で，当時入手し得た数多くの文献資料を使っている形跡があるが，ただその解釈，利用の仕方には粗雑な面がしばしば窺われるように思われる。また，ローマ人の伝記については，全般に，彼がラテン語が不得手であったことが⑧大なり小なり制約になっていると考えられている。また，彼の個人的好悪がその叙述に影響していると思われる伝記もある。

しかし，伝記とか人物論は結局，解釈という要素が大きく作用し，正確さをそれほど望むことは無理なのであるから，その不正確さは承知した上で，かけがえのない重要な資料として，『対比列伝』を活用すべきであろう。さらに，ローマ史の人物たちをシェイクスピア劇のそれと並べて論ずるとなれば，先に述べたようにプルタルコスがその接点であったのだから，当然プルタルコスが資料の中心とならざるを得ない。しかし，もちろん，その他の資料も必要に応じて援用することとする。

これから以上のような方針で随筆風に気軽にシェイクスピアのローマ史劇とローマ史の人物像を比較検討していきたい。論述は史劇の別に分けて行い，まず『ジュリアス・シーザー』論から始めることとする。もちろん論述にあたってはすべての登場人物と事件を扱うわけにはいかないので，少数の論点に焦点を絞ることにならざるを得ない。以下，カエサルとシェイクスピアのカエサル像（第一章），カエサルとブルートゥス（第二章），アントニウスとシェイクスピアのアントニウス像（第三章）のそれぞれの関係について順次論述することにしたい。

（文中のシェイクスピアからの引用の原文，および行数はいわゆるグローブ版に拠っている。）

(I)

カエサルとシェイクスピアのカエサル像

——彼がもっと肥っていてくれたら！　(1. 2. 198)

カエサル (Gaius Julius Caesar) は前100年頃ローマの名門貴族の家に生れたが，その家柄は当時特別有力なものでも，また富裕なものでもなかった。彼がそこから権勢の階段を登りつめて，ギリシャ・ローマ世界の歴史の方向を決定するまでの存在となったのは，もっぱら彼の才幹と権勢欲の賜物であろう。彼の将軍としての力量については議論の余地がないが，彼の行った急進的な政策や独裁制への傾斜の当否については歴史家の間でもその評価は一様でないし，また彼の人格については，その強烈な個性からして当然であるとはいえ，毀誉褒貶は甚しい。しかし，こうした価値判断を一応別にすれば，この人物の大まかな輪郭は現存する資料からだけでも，かなり確実なものが得られよう。

カエサルの経歴や人柄を知る資料となるのは，前述のプルタルコス，スエトニウス，ディオ，アピアノスなどの著作，それにルカヌス (M. Annaeus Lucanus)[①] の叙事詩『内乱記』(*De Bello Civili*) などの著書とカエサル自筆の『ガリア戦記』(*De Bello Gallico*) と『内乱記』(*De Bello Civili*)，その他，別人の手による彼の戦役についての記録とキケロ (Marcus Tullius Cicero) の書簡などが主なものであるが，この内，プルタルコスとスエトニウスがカエサル伝の二大源泉とされる。

カエサルは早くから政治活動を始めたが，以後その経歴のすべてにわたって窺われるのは，知謀と胆力，行動力と正確な判断力などの特徴であろう。彼は政治活動に必要な弁舌においても勝れ，当代最高の弁論家，ホルテンシウス

(Quintus Hortensius)，キケロに肩を並べる存在であった。彼の本格的な軍歴は前61年任地西部スペインに赴いた時から始まるが，その時彼は39歳であった。[②] 以後彼はガリアでの数多くの征服戦から，ポンペイウス (Gnaeus Pompeius) との対決，及びその後のポンペイウスの残党の平定戦において，常に終局的に勝利を得たが，彼のこの軍人としての資質及びに実績において並ぶ者は，古代西欧世界ではアレクサンドロス大王，及びハンニバルぐらいしかあるまい。(因みにプルタルコスの『列伝』では『アレクサンドロス伝』と『カエサル伝』とが対比されている。) 以上のようなカエサルの政治家，軍人としての卓抜の能力を早くから示すのはプルタルコスの伝える次のようなエピソードであると思われる。

その話はカエサルが24歳の時弁論術を学ぶためロードス島に航海中[③]捕えられた時のことについてである。

彼は海賊から身代金二十タラントンを要求されると，お前たちは誰を捕まえたか知らずにいるのだとばかり嘲笑し，自分の方から五十タラントンを約束した。それから部下をその金を調達させに方々に送り，自分は一人の友人と二人の供とだけで，このもっとも殺伐なキリキア人の盗賊の中に残った。しかし彼はまったく彼らを問題とせず，眠りたい時は人を送って黙るように命じたほどであった。〔中略〕ミレトスから届いた身代金が支払われ，釈放されると，彼はただちに兵を募り，ミレトス港から海賊の後を追って行き，彼らがまだ同じ島に碇泊中のところを見つけた。そこで彼は一味のほとんどを捕え，財物は戦利品とし，身柄はペルガモンまで連れて行き投獄した……（『カエサル伝』2節）

その後彼は島で海賊たちに宣言していたように彼らを磔刑にしてしまうのであるが，それにしてもこれはいかにも彼らしい対応ぶりを示す事件である。(もっともこの事件の後では，彼は海賊仲間には知られた存在となってしまい，地中海を航海する時はかなり用心したらしい。)

ところでこのカエサルはまた一方では自己の野心のためには手段を選ばぬ人間であった。彼はローマの政界で買収・供応をこととして民衆に取入ったし，

自分の手先にはクアウディウス (Publius Claudius) とかクリオ (Gaius Scribonius Curio) のようなかなりいかがわしい人格の人物を使っていた。そして彼の傲慢と王位への執着が彼の暗殺の動機，または口実を与えることになったのは周知のとおりである。

しかしカエサルの暗殺事件には，彼の寛大さという大きな美点が遠因となっていることも忘れてはならない。概して，彼は同胞のローマ人にはかっては敵対したものにも驚くべき寛容を示した。それは若い頃カエサル自身も窮地に追い込まれたスッラ (Lucius Cornelius Sulla) の残酷，非情さとはきわめて対照的である。プルタルコスも“人々がカエサルの寛大な心に対する感謝のしるしとしてクレメンティア（仁慈の女神）の神殿を建てる決議をしたのは数多くの栄誉の中でもとりわけ彼にふさわしいものであった”。(『カエサル伝』57節) と言っているほどである。しかし，この寛大さが彼の政敵を結集させることを許し，彼の命取りとなったのであった。

彼の文才もなかなかのものであったらしく，若い頃には詩作に親しんでいたことは先の海賊に捕った時のエピソードの中にもあらわされている。また彼が著したと伝えられる文法論や警句集，『反カトー論』(*Anticatones*) などは散逸してしまったが，上述の二つの戦記は残存し，その簡潔な文体は技巧を隠した真の技巧と言うべき味わいがある。元老院派の重鎮としてカエサルに敵対することの多かったキケロすらその出来映えを賞賛せざるを得なかった。④

きわめて簡単ではあるが以上のようなカエサルの人物像とシェイクスピア劇中のカエサルと較べてみるとどうであろうか。正直なところ，人間描写という点から言って，シェイクスピアのカエサルはまったく生彩を欠いていると言わざるを得ない。『ジュリアス・シーザー』という表題にもかかわらず，カエサルの劇中の登場場面はあまり多くないが（一幕二場，二幕二場と三幕一場），そこでの彼の態度は虚勢に満ち，その言葉は終始修辞的な飾りに包まれている。また作中の他の人物が描写するカエサル像もはなはだしく矮小化されている。一

言にして言えば，シェイクスピアのカエサル像には良いにせよ，悪いにせよカエサルのカエサルたる特徴がほとんど見られないのである。

虚勢を張るカエサルというのは当時の演劇でのひとつの型であったらしく，シェイクスピアの継承してきた演劇の伝統とたぶんに関係があるらしい。この問題はH・M・エアーズ[5]やJ・D・ウィルソン[6]の考察などに詳しく扱われているが，この型は結局，ガルニエ (Robert Garnier) やミュレ (Marc Antoine Muret) などフランスの劇作家を経て，セネカ (Lucius Annaeus Seneca) の悲劇『オエタ山のヘラクレス』(*Hercules Oetaeus*) 中のヘラクレスの語調，いわゆる“ヘラクレス調”に源を発しているらしい。

シェイクスピアのカエサルの言葉も大仰で，一種の空疎な響きがある。以下にその例を二，三示してみることにする。

“もしもわが名が怖れを知るものならば……” (1. 2. 196)

“危険自身もカエサルの方がもっと恐ろしい
ことをよく知っている。われらは同時に
生れた二頭の獅子……” (2. 2. 44～6)

“しかしわれはその不動の性において
天界に並ぶものなき北極星のごとく，
確固不変の意志を持つ者である”。(3. 1. 60～62)

このような文体はなるほどある程度までは自負心の強いカエサルの自意識を反映する方法であり得るが，しかしそれにしても他の人物の言葉と比較した時，あまりにも修辞的な形式ばったものであり過ぎ，カエサルの偉大さを表わすどころかどこか戯画的な響きを帯びてくる。この印象は他の面でのシェイクスピアの辛辣なカエサルの扱い方と考え合せるといっそう深まらざるを得ない。

『ジュリアス・シーザー』においては，カエサルについてのプルタルコスの

記述にいくつかの変更が加えられている。それによってシェイクスピアがどのような演劇的効果を意図したのかは難しい問題であるが，そのほとんどはカエサルを貶める方向に働いていることは確かである。[7]

一幕二場では，ルペルカーリア祭においてアントニウス (Marcus Antonius) がカエサルに冠を捧げた一件がカスカ (P. Servilius Casca) によって語られる。カスカの話は情況設定からして観客には事実として受け取られるものである。そこではカエサルは冠を三度とも斥けざるを得ないのであるが，しかしその拒絶がかえって民衆の歓呼を惹き起こし，自分の目算がはずれたことを知ったカエサルは激昂し，胸をはだけて喉を見せ，切りたければ切れと言ったことになっている。[8] さらにすぐその後で癲癇の発作を起したというのである。

この箇所の出典は『カエサル伝』61節と『アントニウス伝』12節である。『カエサル伝』では冠辞退の事件の描写には，カエサルが怒って喉元を示したという記述は入っていないので，これが述べられている『アントニウス伝』によったことになるが，ただし，『カエサル伝』の60節では別のある時，元老院で彼は傲慢な態度で多くの者を憤慨させてしまったので，家に帰り，友人たちに喉元をあらわにして殺したいものには殺させると叫んだという事が述べられている。これは実際は同一事件のようで，この点については『カエサル伝』と『アントニウス伝』との間にはプルタルコスの混乱があり，筆者には『カエサル伝』が真実に近いように思われるが，いずれにしても，シェイクスピアはカエサルをより卑小にする方を選んで使っていることになる。

また，この場面で伝えられる彼の癲癇の発作はシェイクスピアの創作で，プルタルコスにはそのような記述はない。癲癇がカエサルの一種の持病であったらしいことは先に挙げた古代の史家たちが言及していることから間違いないと思われるが，[9] プルタルコスは二箇所でそれに触れている。まず『カエサル伝』17節では彼の体質との関係でそれが簡単に述べられ（後述），また53節では彼がスキピオ (Q. Caecilius Metellus Pius Scipio) とユバ王の連合軍とアフリカで戦

った際にその発作が起きたという一説を紹介している。しかし，プルタルコスではこれがすべてであり，また他のどの史料においてもルペルカーリア祭での彼の発作を示唆するものはない[10]。ただ，先に紹介した『カエサル伝』60節中でのカエサルが元老院を侮辱した事件の際，後でカエサルが自分のその病気を口実に使って言い訳したという旨のプルタルコスの文章がシェイクスピアの発想の契機になったことは十分考えられる。

また一幕二場にはカッシウス(Gaius Cassius Longinus)がブルートゥス(Marcus Iunius Brutus) と話し合っている内カエサルを誹謗する箇所がある。彼の話によれば，かって彼とカエサルは泳いでティベル河を横断する競争をしたが，カエサルは途中で溺れかかり，カッシウスに救いを求めたことになっている。これはまったくのシェイクスピアの創作であって，そもそもカッシウスとカエサルがこのような親しい間柄を持ったことを示す資料もなければ蓋然性もない。

じっさいにはカエサルは稀にみる水泳の達人だったらしい。プルタルコスによれば，カエサルがエジプトの内戦に介入した際，一時はかなりの危機に瀕し，ファロスの塔附近の戦闘においては，彼は小舟に乗っているところを敵に襲われ，海に飛び込みやっとのことで難を逃れた。(『カエサル伝』49節)。“この時手に持っていた書類を離さず，濡らさぬよう片手を高く差上げて，射かけられる多くの矢のため時には水中に潜らねばならぬほどであったが，片手で泳ぎ切ったそうである”。 スエトニウスの伝える情況はやや異るが，片手に書類を持って泳いだことは同じで，その二百ヤードほどの距離を自分の紫衣を敵に渡さぬため歯でそれを引いて泳いだことになっている。(『ユリウス・カエサル』64節)[11]。ここまで来れば，多少誇張が混っている観は否めないが，それを割引いても彼が大泳者であったことは十分窺えるし，因みにこの時のカエサルの年齢は53歳のはずである。

また，カッシウスは同じ場面でスペインでカエサルが熱病にかかった時の柔弱な様子を述べているが，これはプルタルコスがカエサルの外見上のひ弱さと，

それに対する彼の克己心を述べている箇所を拠りどころとしていて(『カエサル伝』17節)，結果としてはプルタルコスの意図とシェイクスピアのカッシウスの叙述は正反対のものとなっている。プルタルコスでは次のように述べられているのである。

というのは彼の体つきは細く，色白で，皮ふが軟く，また頭痛にしばしば悩まされ，時には癲癇を起したが(その最初の発作はスペインのコルドゥバで起ったと伝えられる)，だからといってそれを自分を甘やかす口実とし，病に屈することなく，むしろ逆に病弱を癒す薬として，戦場をめぐり，病と闘い，たえず旅行し，節制に努め，野外で寝起きするのを常とした。(『カエサル伝』17節)

カッシウスの言葉の場合には，先のカスカの言葉の場合のようにそれがすぐさま事実の陳述であるとするのは，やや問題がある。なぜならそれは，彼の性格描写やブルートゥスに対する説得の話術ともからんでくるからである。しかし，カッシウスがカエサルについて述べたことが虚偽であると観客に取られるように書かれているのだと言うことは全体的な印象として無理があると思われる。ともかく相手のブルートゥスはカッシウスのその話を反論することなく受け入れるという設定になっているのである。

以上に示したように，シェイクスピアは一般にカエサルに辛辣で，その性格に理解をほとんど示していないように思えるが，そのことを明瞭に示していると思える表現がある。それはカエサルが人間の類型についての洞察を述べる，よく知られた箇所である。

“わしのまわりには肥って，頭の手入れのよく行届いた
男たちを置いてくれ，そしてよく眠る者たちをな。
あのカシアスはやせた，ひもじそうな顔をしていて
考えることが多すぎる。ああいう男たちは危険だ”。(1. 2. 192〜195)

これは人間の体型と気質の相関を指摘した有名なエルンスト・クレッチマーの業績の先駆をなすような鋭い洞察であって，人間観察に秀でたシェイクスピアならではの表現と考えたくなるところである。[12] しかし，実際にはここに述べられた主旨のことはプルタルコスの『カエサル伝』62節，『ブルートゥス伝』8節，『アントニウス伝』11節，と重複して出てくるのであって，この箇所はシェイクスピアがプルタルコスに拠ったことは間違いない。ただプルタルコスではやせた危険な人物としてカッシウスとブルートゥスが意味され，肥った安全な人間としてアントニウスとドラベルラ (P. Cornelius Dolabella) がほのめかされたことになっているのだが，シェイクスピアの劇ではこのセリフをカエサルがアントニウスに対して言うようになっており，カッシウス以外の人物への言及は含まれていない。

シェイクスピアのカエサルはこの危惧をアントニウスが否定すると，“彼がもっと肥っていてくれたら！　しかしわしは恐れはせぬ……”と言葉を続ける。この“彼がもっと肥っていてくれたら！”というセリフは，もちろんシェイクスピアが創作したものだが，これにはそれまでのセリフ中の人間観察の面白さを減じかねない一種の安易さがあるように感じられる。そしてそれ以上に，この言葉はカエサル的特性の正反対のものであって，シェイクスピアのカエサルの性格に対する無理解を端的に示すものと思われる。なぜなら，いかなる困難に際しても，つねにその状況と折合い，それを切抜ける方策を見出してきた行動人のカエサルからすると，この種の現実に対する願望は彼には異質のものであり，さらにそれを人の面前で口にすることはいっそう異質なものであるからである。そういう意味で，この言葉はシェイクスピア劇の非カエサル的なカエサルを象徴するものと言える。(もっともシェイクスピアがこれを意識して書いたとするのは言い過ぎで，実際は何気なく書いたものだろう。)

以上のようにこの劇でのシェイクスピアのカエサルの扱い方は辛辣であり，またシェイクスピアは彼の性格への妥当な理解も示していないことがわかる

が，このことは劇中の他の人物の扱い方と較べるとやや奇異な感がある。それでは，この原因は一体何であろうか。答はなかなか難しく，色々な角度から考えることが必要であろう。もちろん，シェイクスピアの個人的な嗜好，好悪とも関連しょう。また，彼の生きた時代の制約ということもある。すなわち，当時の英国の政治事情とも関連するであろうし，また当時の一般のカエサルについての評価も関連があると考えられる。さらに，先に触れたカエサルが扱われている先行演劇の範や枠が影響を及ぼしていることも考えられる。

以上の点についての考察はこれまでのシェイクスピア研究にゆずるとして[13]，ここではもうひとつの要素，すなわちシェイクスピアのカエサル観について影響を及ぼした可能性のある書物について論ずることにしたい。

先に挙げたカエサルに関する文献の内，ルカヌスやディオの著作には反カエサル的感情が表われているが，しかし，その根拠となるような記述については，プルタルコスの『カエサル伝』，『ブルートゥス伝』をほとんど出るものはない。またスエトニウスの『ユリウス・カエサル』はかなり客観的筆致によっていて，いわば中立的なものである。したがって，以上の文献をシェイクスピアが目を通す機会があったかどうかは不明であるが[14]，かりにあったとしても，それほどカエサルに対する反撥を育てたとは思えない。

実はこれらの著作以上に強力な反カエサル的著作が，プルタルコスの同じ『対比列伝』中に存在するのである。『カエサル伝』，『ブルートゥス伝』，『アントニウス伝』の三つが『ジュリアス・シーザー』の直接の素材であることは先にも述べたが，『対比列伝』中にはその他にもカエサルと同時代人で，彼と顕著な政治的接触を持った人物の伝記として『ポンペイウス伝』，『クラッスス伝』，『キケロ伝』，『小カトー伝』などがある。これらの伝記を読んだとする積極的証拠をシェイクスピアの作品中に見出すことは難しいが，劇作には用いなくとも純粋に楽しみのために読んだ可能性は小さくはないであろう。そして彼が読んでいたとすれば『小カトー伝』はシェイクスピアの反カエサル感情を

説明するかなり有力な手がかりになると思われる。

小カトー (Marcus Porcius Uticensis Cato) は厳格で清廉な，つねに正義を重んじる政治家として人々の尊敬を集めた。カエサルに対しては終生，激しい，そして手強い政敵であった。それは早くからカエサルの野心を見抜き，共和制の擁護者として，カエサルの不法な政策，手段に断固として反対したからであった。『小カトー伝』ではカエサルが権力や地位を自由にするために用いた買収，暴力，謀略などかなり詳しく述べられていて，『カエサル伝』などではあまり窺うことのできないカエサルの無法ぶりを知ることができるが，同時にそれに対抗する小カトーの一徹な抵抗の様も描かれている。

『カエサル伝』においては，プルタルコスの反カエサルの感情は抑制されていて，ほとんど目につかないが，『小カトー伝』では鮮明に表されている。この伝記は『対比列伝』の中でももっともプルタルコスの考えが叙述に影響している部類に入るであろう。小カトーの死後 (前46年) キケロの小カトー賞賛の書『カトー論』(*Cato*) があまりにも評判を得て，その影響を面白からず思ったカエサルは小カトーに対する色々の非難を集めて『反カトー論』を書いた。『小カトー伝』では今は失われてしまったこの『反カトー論』の論点となっている出来事がいくつか紹介されていて興味深いものであるが，その紹介の後でプルタルコスはその誹謗をひとつひとつ力強く反論している。

ところでカエサルの暗殺の主謀者となったブルートゥスには，プルタルコスが述べるところではかなりこの小カトーに似通った面がある。ブルートゥスも小カトーと同じく，政治家としては節制，清廉，正義心などの徳性の故に人々から尊敬されたし，また両者は学究としての側面においても共通していた。この類似の原因はひとつには一般にプルタルコスの人間理解に巾がなく，別の人物を述べていても一定の型に収束する傾向があることと関連しょう。

しかしまた，両者の共通性の背後には実は一種の因果関係も存在しているのである。というのはブルートゥスは小カトーの甥にあたり，プルタルコスによ

れば，彼は子供の頃に小カトーに連れられて旅行したこともあり，“この人をローマ人の中でももっとも敬愛した”（『ブルートゥス伝』2節）のであった。ブルートゥスは後には小カトーの娘ポルキア（Porcia）を娶り，血縁関係がより深まるのであるがこれもブルートゥスの小カトーへの敬慕の念からするものかも知れない[15]。しかし，小カトーとブルートゥスを較べた場合，自己の政治信条への忠実さ，具体的にはカエサルの専制への抵抗，において前者がずっと激烈で，強固に感じられる。それはもちろん，両者の性格の相違に発しているということが大きいが，また，次章で述べるようにブルートゥスのカエサルに対する関係は微妙で，屈折したものであるからでもある。

したがって『ブルートゥス伝』ではあまり旗色の鮮明でないプルタルコスも『小カトー伝』ではカエサルに対立した小カトーの方に同情をはっきりと示している。『ジュリアス・シーザー』の直接の素材となった三篇の伝記の各々の主人公の内，ブルートゥスが他のカエサル，アントニウスと対立する関係にあり，また『ブルートゥス伝』が中でももっとも重要な扱いを受けているのであるが，その『ブルートゥス伝』を参照してもなお，シェイクスピアのカエサルの扱い方に納得のいかないものを感じるならば，『小カトー伝』という廻り道をすることでそれはかなり解消されると思うのである。

なお，『ジュリアス・シーザー』が扱う時期は小カトーがカエサルの軍門に下るのを潔しとせずウティカで自殺して後に当っており，小カトーが直接関係を持つことはないが，それでもこの劇には二つほど小カトーに関連するエピソードを盛込んである。これらは『小カトー伝』最終節に言及はあるが，直接の典拠はやはり『ブルートゥス伝』の方である。そのひとつはブルートゥスの妻（Porcia）が小カトーの娘にふさわしい覚悟で夫の企てを支えようとしたエピソードであり（二幕一場，『ブルートゥス伝』13節），もうひとつは小カトーの息子（Marcus Porcius Cato）がブルートゥス軍のためにオクタウィアヌス（C. Julius Caesar Octavianus）とアントニウスの連合軍と戦い，最後は自ら小カトーの息

子と名乗りをあげ，勇壮な戦死をとげるというエピソードである（五幕四場，『ブルートゥス伝』49節）。ただし，この人物は小カトーとは性格があまり似ていなかったらしく，『小カトー伝』では，“怠惰な性格で，その上女好きであったと言われている”とある。しかし“こういう不評判を彼は名誉の死によって終らせた”（『小カトー伝』73節）のであった。 (1976年11月)

〔注〕

（序）

① 文中に引用和訳した部分の原文はシェイクスピアとの比較の関係から，原則としてノース（後述）の英訳版を用いた。ただし叙述上の便宜から，Loeb Classical Library 版の英訳（Bernadotte Perrin 訳）*Plutarch's Lives* に採用されている節区分と節番号を採用した。（ノースのものにはこのような区分はない。）

② 『比較論』の残っていないものが少数ある。

③ これは1559年に刊行された Jacque Amyot の仏語訳から英訳され，1579年に刊行された。アミヨは独自で本文校訂して仏訳している。拙稿で使用したノース訳は David Nutt 出版（London, 1895）のものである。

④ Robert Graves の英訳による Penguin 版 *Twelve Caesars* (1957) を用いた。節の番号もこれによる。

⑤ Loeb 版の英訳，*Appian's Roman History* (1913) を用いた。

⑥ 本来はギリシヤ人で著作もギリシヤ語で書いているが，実質上はローマ人と見做されるので通常のラテン名による表記にした。なお，これも Loeb 版の英訳，*Dio's Roman History* (1916) を用いた。

⑦ プルタルコスは『アレクサンドロス伝』の冒頭の節で「私の意図は歴史を書くことではなく伝記を書くことだ。というのはどんなに優れた業績もかならずしも人の美点，欠点を示すとは限らず，しばしば何気ない事や言葉やたわむれが万余の兵が死ぬ戦闘や，攻囲によって陥ちた町や軍隊以上に生来の性格，態度を語ることがあるからである。」と言っている。しかし，彼の人間探究にはそこから教訓を得て自身及び読者の向上を計るという倫理目的が重っているのも確かである。これについては『パウルス伝』1節を参照のこと。

⑧ 彼は「私はローマや他のイタリアの地に赴いたことがあるが，自分の重大任務や哲学の教授を乞う人々のため，ラテン語の学習をする暇がなかった。遅まきながら，年をとってからラテ

ン語の著作を手に取った次第である。」（『デモステネス伝』2節）と言っている。

（I）

① 通称 *Pharsalia* と呼ばれるが，これは元来誤解より生じたものである。この詩の歴史資料としての価値はあまり高くないと思う。

② カエサルの生年は古代史家の伝えるところでは前100年であるが，J. Carcopino は前101年，J. Mommsen は前102年と推定している。拙稿では前100年説に従った。

③ プルタルコスではビュティニアのニコメデス王のところからの帰航の途中となっているが，これは誤りである。ただし，その捕えられた島の位置から，ロードス島行きが彼の航海の本当の目的であったかどうかは疑問がある。

④ キケロの『ブルートゥス』(*Brutus*) 中。スエトニウスは『十二皇帝伝』中の『ユリウス・カエサル』の56節でキケロとヒルティウス (Aulus Hirtius) の賞賛の言葉を伝えている。

⑤ H. M. Ayres, "Shakespeare's *Julius Caesar* in the Light of Some Other Versions," P. M. L. A. (1910), XXV, pp. 183-227 参照。

⑥ J. D. Wilson, "Introduction", *Julius Caesar* (New Cambridge Shakespeare) pp. xix-xxvii 参照。

⑦ 例外はプルタルコスではアルテミドロスの密告の書面をカエサルは受取ったが，それを読む暇がなかった（『カエサル伝』65節）ことになっているのを，シェイクスピアのカエサルは『わが身に関するものは後廻しがよい』と言って，その書面を斥けるように変えてある箇所ぐらいであろうか。(3. 1. 8)

⑧ シェイクスピアでは "doublet" の胸をはだけたことになっていて，これは明らかに時代錯誤である。ノースの訳も『アントニウス伝』では "gown" になっているが，『カエサル伝』60節では "doublet collar" になっている。なお，アミヨでは "robe" である。

⑨ これはカエサルの家系についての最近の研究によっても裏付けられている。なおこのことは，後で触れる人間の類型という観点からは，カエサルの粘着質の気質とも関連することであろう。（以上二点はMichel Rambaud,『シーザー』《クセジュ文庫》白水社刊，pp. 35-36 参照。）

⑩ ただし，晩年ローマに落ち着くようになってから彼の持病の状態が悪化していたらしいことはスエトニウス（『ユリウス・カエサル』45節）やアピアノス（『ローマ史』中，『内乱篇』2巻110節）に述べられており，ひとつにはこれが彼にローマを去ってパルティアに遠征する計画を促す原因となったらしい。

⑪ ただし，ディオの記述によるとカエサルは紫衣を捨て，そちらに敵を引き付けて逃げたことになっている。片手に書類を持って泳いだということは変りがない。ディオ（前掲書）42巻40

節を参照。

⑫ 中野好夫氏は『シェイクスピアの面白さ』（新潮選書）pp. 37–38 において，この箇所をクレッチマーを引用しつつシェイクスピアの人間観察の鋭さを示すものとして賞め上げている。

⑬ これらの点に関しては J. D. Wilson,（前掲書）が参考になる。

⑭ J. D. ウィルソン は Christopher Marlowe によるルカヌスの『内乱記』1巻の英訳の一部ジ』ュリアス・シーザー』中の表現の類似を指摘している。これについては J. D. ウィソン（前掲書）p. 137 参照。

⑮ 前45年。ただし，ブルートゥスもポルキアも再婚であり，ポルキアの最初の夫はカエサルに敵対する立場を取ったビブルス（L. C. Bibulus）であった。